アイヌ語の場所表現に見られる定性に関する考察

―英語の weak definite との比較を通して―

井上 拓也
京都大学大学院

要旨

アイヌ語の場所表現においては，定性がその制約に関わっているという指摘がなされている（中川 1984, 井筒 2006, 北原 2006）が，場所表現で現れる名詞句が定表現とは解釈できない場合も存在する。本研究では，英語の場所表現における定冠詞を伴う名詞句が「弱い定性 (weak definite, Poesio 1994) 」を持つとして解釈されることから，アイヌ語の場所表現において位置名詞を用いる場合と場所名詞を用いる場合は，単なる定性 (regular definite) だけではなく，weak definite がその制約に関わっていることを示した。

1　はじめに

アイヌ語[i]では，英語の冠詞 *the* のように定性 (definiteness) を明示する標識は存在しない。しかし，アイヌ語の場所表現においては，定性がその制約に関わっているという指摘がなされている（中川 1984，井筒 2006，北原 2006）。しかし，場所表現で現れる名詞句が定性を持つとは言えない例も存在する（田村 1985, 安齋 2008）。

本研究では，アイヌ語の場所表現の中でも (1) 位置名詞を用いる場合と (2) 場所名詞を用いる場合を分析対象とし，それと意味的に対応すると考えられる英語における weak definite の解釈との比較を通して再分析することで，従来の定性 (regular definite) の概念では捉えられないアイヌ語の場所表現について weak definite の観点から説明することが可能となることを主張する。

2　アイヌ語の場所表現の概説

ここでは，場所表現と，その中で現れる場所名詞と非場所名詞，そして位置名詞についてそれぞれ定義した上で，アイヌ語の場所表現における文法的制約について確認する。

2.1　場所表現，場所名詞，非場所名詞

場所表現とは，「学校に行く」や「家へ帰る」などのように，ある名詞句が移動の起点や着点，イベントの生起する場所を意味的に含んでいる表現である。その中で，「学校」や「家」など場所格の位置に生起する名詞は場所名詞と非場所名詞に分けられる。場所名詞とは，場

所表現において他の名詞を必要とせず，独立に助詞の前に置く事ができる名詞である。一方で，非場所名詞とは，独立に助詞の前に置く事ができないという制約のある名詞である（田窪 1984: 91-92）。

以下，日本語の場所表現の例において，場所名詞と非場所名詞について解説する。以下の例文は筆者による作例である。

(1) a. 病院に行く

b. ??ドアに行く

(2) a. 病院の前に行く

b. ドアの前に行く

(1a) において「病院」は，移動動詞「行く」の着点を表しており，ニ格の前に直接置くことができるため，場所名詞であるが，(1b) のように「ドア」はニ格の前に直接置くと不自然となるため，非場所名詞である。一方で，(2) のように「〜の前」という位置名詞を補うことで，どちらの名詞もニ格の前に置くことができる。位置名詞については次の 2.2 節で解説する。

本来，文法的に考えればあらゆる名詞は助詞の前に立つ事が可能であるが，(1) で見たように，一部の名詞は場所表現の中で独立に助詞の前に置く事ができないという制約がある点を考慮し，これを「場所表現における文法的制約」と呼ぶことにする。

ただし，留意しておきたいのは，日本語の場合，場所名詞は名詞に内在した特性ではなく，場所表現において用いられる時に場所名詞か否かが判断される，という点である。例えば，「ドア」は (1a) では非場所名詞であるが，例えば「ドアに虫が止まっている」という文においては「ドア」は動作主である虫が止まるというイベントの生起する場所と解釈されるため，場所名詞となる。よってここでは，日本語において場所名詞か否かは共起する動詞の種類（文脈）や話者の解釈によって決まると考える。一方で，2.3 節で見るようにアイヌ語の場所名詞は文脈によらず一定である。この点が日本語とアイヌ語との決定的な違いである。

2.2 位置名詞

位置名詞は，(2b) の「ドアの前」における「前」のように，非場所名詞につくことで全体として場所表現の中で現れることができる名詞句を形成する名詞として定義する。中川 (1984: 150) や田窪 (1984: 91) は，名詞句を格助詞の前に直接置くことができるとき，その名詞句全体が場所と解釈されると表現しているが，これは意味的に場所として解釈されるということではなく，あくまで文法的な特徴としての場所である。

位置名詞には，「上」「下」「左」「右」などのほか，「側」や「方」などの相対的な位置を表

す名詞が挙げられる（田村 1982: 1，中川 1984: 151）。

2.3　アイヌ語の場所表現

ここでは，アイヌ語の場所表現の事例を検討する。まず，アイヌ語においては，*ta*「～に，～で（存在の場所，時間，移動の着点）」，*un*「～へ（方向，移動の着点）」，*wa*「～から（起点）」，*peka*「～を通って（運動が行われる場所，時間）」，*pak*「～まで（着点）」といった，移動や存在を表すような格助詞を用いる場合，先行する名詞（句）は以下の (3) のような制約を受ける（中川 1984，田村 1985，井筒 2006）[ii]。

(3) a.　??cise　ta　hosippa　=an.
　　house　LOC　RETURN=1SG
　b.　cise　or　ta　hosippa　=an.
　　house　place　LOC　RETURN=1SG
　　‘私は家に帰った’

(3a) では，*cise*「家」は概念形[iii]であり，位置名詞を省略することはできず，文法的に不適格となるため，必ず (3b) のように位置名詞 *or*「～の中，～のところ」を後置しなければならない。このように，アイヌ語の名詞はほぼ非場所名詞であり，必ず位置名詞を用いる必要がある。以下，表 1 でアイヌ語の位置名詞の例を示す。*-ke* は名詞に付いて「～側，～の方，～の部分」という意味を形成する接尾辞である。

表 1　アイヌ語の位置名詞の例

アイヌ語の位置名詞　（概念形 / 所属形）	日本語訳　（概念形／所属形）
corpok, corpoki / corpokike, corpokke	下／下側
enka, enkasi / enkasike	（接触していない）上／上側
onnay / onnayke	中／中側
soy / soyke	外／外側
or, oro / oroke	中，ところ／内の方
piskan, piskani / piskanike	周囲／周囲の方
sam, sama / samake	そば／側

一方で，以下の例のように *kim*「（狩場としての）山」などの場所名詞は位置名詞を省略することが可能である。

(4)　kim　ta　paye=an.
　　mountain　LOC　GO=1SG

‘私は山に行く’

アイヌ語の場所名詞[iv]は文脈によらず一定であり，先行文脈によって場所名詞であるかどうかが決まる日本語の場合と異なる。表 2 に挙げるものは場所名詞の一部である[v]。

表 2　アイヌ語の場所名詞の例

アイヌ語の場所名詞（概念形 / 所属形）	日本語訳（田村 1996 を参照）
kim / kimke	（独立的に）山，（相対的に）…の山手
pis / piske	（主に生活圏としての）浜，海岸
ya / yake	（独立的に）陸地，（相対的に）…の浜
rep / repke(he)	（独立的に）沖，（相対的に）…の沖

アイヌ語の位置名詞は，文脈が特定されない場合は，所属形（長形）の接辞 *-ke* をつけなければ格助詞の前に独立して置くことができない。一方で，アイヌ語の場所名詞は独立で格助詞の前に置くことができる。次の節では，アイヌ語の場所表現の制約に関する先行研究を概観する。

3　先行研究と問題点

場所表現に共通する特徴として，格助詞に先行する名詞句の定性[vi]が挙げられている。本節では，この定性に関する指摘を行っている先行研究を概観する。

3.1　定性の観点からの分析

井筒 (2006: 18) は，以下の例文を挙げつつ，位置を表す格の目的語に立つ名詞句に働く制約について，定性 (definiteness) が大きく関わるとしている。

(5) a.　cise　or　ta　hosippa　=an.
　　house　place　LOC　RETURN　=1SG
　　‘私は家に帰った'
　b.　nean　cise　ta　hosippa　=an.
　　the　house　LOC　RETURN　=1SG
　　‘私はその家に帰った’
　c.　an　=kor　cise　ta　hosippa　=an.
　　1SG=HAVE　house　LOC　RETURN　=1SG
　　‘私は自分の家に帰った’　(井筒 2006: 18)

上記の例文における *cise*「家」は，(5a) の場合は *or* を伴って「自宅」，(5b) は「先行文脈で言及された家」，そして (5c) は「話し手の家」という形で解釈される定表現となる。これ

をもって井筒 (2006: 18) は，場所表現で格助詞の前に現れる名詞句は場所的存在を表すものでなければならない，というよりも，定表現でなければならないという制約があるのではないかと指摘している。

その根拠として，場所表現では (5b) のように指示詞を伴うものや， (5c) のように人称接辞を伴って所属形になっている名詞句も現れることができるという事実が挙げられている。指示詞も所属形も共に典型的な限定詞 (determiner) であるため，これらが付加した名詞句には定性があるといえる。そこから一般化すれば，井筒 (2006) が主張するように，場所表現で現れる名詞句には定性がなければならない，ということになる。

北原 (2006: 119-120) は，アイヌ語の場所表現の制約は英語の名詞の定・不定の明示的な区別と対応しているため，アイヌ語には定表現・不定表現の区別が文法的に関係すると主張している。一般的に，定性とは談話の中で既出の事物，あるいは話し手や聞き手の間で既知のものを指示対象とし，同定させる役割を持つ。簡単に言えば，定性とは，既知性や文脈の中での照応，同定あるいは唯一性，包括性という点において特徴付けることができる (Lyons 1999: 3)。

先行研究の説明に従えば，アイヌ語の場所表現で現れる名詞及び名詞句には以上のような特徴があり，逆を言えば，このような定性を表す要素が名詞句になければ，場所表現で扱うことはできない，ということになる。

3.2 定性による分析の問題点

しかし，以下の例における名詞句の定性は，上記の定性に必要な特徴から外れてしまう。

(6) sine pon toska ka un a =esoykosanu ayke
one small hill upside LOC 1SG=EXIT then
‘一つの小さな丘の上へ出ると’ （安齋 2008: 339）

sine「1 の，ひとつの」は，*sinean* で「ある日」と訳されるように，「ひとつの，ある〜」と訳される英語の不定冠詞 *a* に相当するといえる。したがってこの名詞句 *sine pon toska ka* は不定と解釈するのが妥当である。先行研究における「場所表現が使えるのは格助詞の前に来る非場所名詞（句）が定性を持つときのみに限られる」という説明では，名詞句が定性を持たない (6) の例を説明することができなくなるのである。

一方で，Poesio (1994) や Carlson et al. (2013) では，上記の定性の特徴である「既知の情報や先行文脈」がない場合でも *the* が用いられることが報告されている。例えば，空間表現に限って言えば，英語では *at* {*the* / (**a*)} *bottom of the ship* のように，必ずと言っていいほど *the* を伴う必要がある。このように，「既知性・照応性，または唯一性・包括性」という定性を特徴付ける要が欠如しているにも関わらず *the* が用いられるのが通例である (Lyons 1999)。

上記のような表現における定性は “weak definites” (Poesio 1994) と呼ばれている。以下，まず 4 節では，英語の位置表現での定性が weak definite として解釈されることを確認し，それ

と対応するアイヌ語の場所表現における位置名詞が weak definite として解釈されることを指摘する。続く 5 節では，表 2 で列挙した場所名詞も同様に weak definite として解釈できることを指摘する。

4 “weak definites”と位置名詞

まずこの節では，Poesio (1994) で指摘された“weak definites”の概念について再確認し，この観点からアイヌ語の位置名詞を分析する。

英語の位置名詞は，3 節の終わりでも見たように “*the* top / bottom of …” や “*the* side of …” などのように，ほぼ義務的に *the* を伴う必要がある。この *the* は照応でも同一性でもなく，あるいは唯一性や包括性でもない。このように通常の定表現 (regular definite) の定義から外れた解釈が，weak definite としての解釈である。

4.1 節では，英語の空間表現で *the* が用いられるのはなぜかということについて論じ，4.2 節では，その議論を踏まえて，アイヌ語の場所表現中の位置名詞を伴う名詞句は定性を持つといえるのかどうか，持つとすればどのような定性なのかについて明らかにする。

4.1 “weak definites”と英語の位置名詞

Poesio (1994: 282) では，weak definite として解釈される例で場所表現が紹介されている。

(7) The village is located on *the side* of a mountain.

(Poesio 1994: 282)

(7) における *the side* はいかなる文脈の指示対象とも照応しておらず，存在物として唯一であるわけでもない。例えば，村が山のどの方角の側面にあるのかを話者が知らなかったとしても，*the* を用いることができる。*side* は，＜山＞と＜側面＞という抽象的な位置の関係性を表しているのである[vii]。

また weak definite として解釈される名詞は限られており，それらは 2 つの概念との関係性を表す関係名詞 (relational noun) であるという (Corblin 2013: 101)。位置名詞はそのような位置の関係を表す名詞のサブカテゴリーであり，従って位置名詞は有限の抽象的な位置関係の中から一つの関係性を特定するといえる。

4.2 “weak definites”とアイヌ語の位置名詞

アイヌ語の場合も，言語的に構造化された有限の位置関係が存在し，その有限なパターンの中から位置名詞を選ぶという点で，具体的な指示対象ではなく，抽象的な「位置関係の種類」を特定しているため，「弱い定性 (weak definite)」として解釈できると考えらえる。

ここで，アイヌ語の場所表現をこの weak definite の観点から再分析すると，先に挙げたアイヌ語の例は次の (8b) のように英訳することができる。

(8) a. sine pon toska ka un a =esoykosanu ayke (= (6))
one small hill upside LOC 1SG=EXIT then
‘一つの小さな丘の上へ出ると’
b. “when I went to *the upper side* of one small hill”

3 節で見たように，(8a) = (6) の *sine pon toska* には唯一性や照応性といった通常の定性 (regular definite) としての解釈はできないが，*toska* を空間的に構造化したときに *ka* によって空間が一意に決定されるという，*toska* と *ka* の間の抽象的な関係が特定されることで，弱い定性が表現されているといえる。

また，次の (9a) の例では，名詞句 *nitek ka* は定でも不定でも解釈が成り立つが，(9b) のように文字通り英訳すると，少なくとも “weak definite” の解釈が成り立つことがわかる。

(9) a. nitek ka ta sine cikap rew wa an
branch upside LOC one bird REST and BE
‘枝の上に一羽の鳥が止まっている’ (田村 1985)
b. There is a bird on a branch. (lit. On *the upper part* of a branch is a bird.)

このように，アイヌ語の位置名詞を用いた場合の定性とは，少なくとも weak definite として捉えることができる。

5 場所名詞の定性

ここでは，場所名詞の定性を weak definite の観点から考察する。(4) の例で見たように，場所名詞は位置名詞を伴わずに場所表現で使うことが可能である。先行研究に倣って言えば，場所名詞は単独である種の定性を持っていると考えられる。その点で，場所名詞は位置名詞と異なり，コミュニティにおける唯一性や習慣性もその定性に与しているといえる。

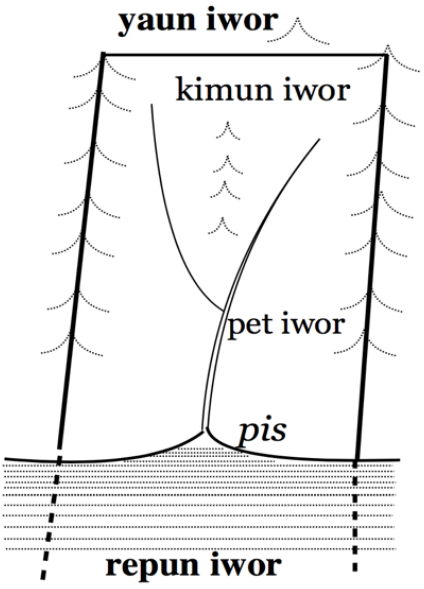

図 1 アイヌ民族の典型的な生活領域 *iwor* の構造（泉 (1952: 30) を元に作図）

図 1 は，アイヌ民族の文化的な生活領域を示したものである。*iwor*（生活領域）は，典型的には主要な河川の流域を中心に山の稜線に沿って明確に分割されており，他のコミュニティの領域を侵犯することはできないとされている（泉 1952: 30）。*iwor* は *yaun iwor*（陸の生活領域）と *repun iwor*（沖の生活領域）に大別され，さらに *yaun iwor* は *kimun iwor*（山の生活領域），*pet iwor*（川の生活領域）に分けられている。これらに加えて，*pis*「浜」を加えた生活領域は，コミュニティにとって一つに定まっているといえる。この図が示すように，アイヌ語話者を取り囲む自然・文化的環境は明確に構造化されている。つまりこれは，(4) の例のように場所名詞が位置名詞を伴うことによる更なる位置関係の特定化を必要としないことが言語外から動機付けられていることを示している。

一方で，辞書の記述（田村 1996, 井筒 2006）を見ても分かる通り，*kim* と *pis* は「山の方—浜の方」という対義語であり，*ya* と *rep* も「陸の方—海の方」という位置的な対比関係を表す。この対応関係は上—下，内—外といった位置名詞の位置的な対比関係と同様，有限なパターンであり，かつ相対的である。また田村 (1996) の記述によれば，*kim* は具体的な指示対象以外にも，*kimke kotan*「山側の村」などの相対的位置にも用いられ，さらに *ya* と *rep* は家の中の囲炉裏の「端」や「真ん中」というようにメタファー的に意味拡張されており，半ば抽象的な位置を表す位置名詞として認識されているといえる。したがって，場所名詞もまた weak definite としての定性があるといえる。

以上の 2 点から，コミュニティにおける唯一性という通常の定性 (regular definite) と，相対的な対比関係を表す weak definite との二つの定性が関与しているといえる。

最後に，weak definite の観点からアイヌ語の場所名詞 *kim*「山」の表す慣習的な意味との関連性を指摘する。Aguilar-Guevara et al. (2011: 188) は，特定の目的語名詞（句）と動詞との共起頻度の高さについて述べている。例えば read - newspaper，listen - radio，play - piano，open -

window のように，目的語位置にある名詞句と特定の動詞との共起パターンが見られるという。共起する動詞は，名詞句の表す対象の典型的な使用法を表しており，少なくとも weak definite として解釈される節の中の名詞句と動詞との意味は概念的に関連し合っていると述べている (Aguilar-Guevara et al. 2011: 190)。特に，次の (10) のように，[go to the X] のような構文では，単なる移動よりも，そこでの行為などを強く喚起する。

(10) He went to the hospital.
‘（医療行為を受けに）病院へ行った’

ここにおいて，[the NP] は，具体的な対象を特定するよりも，その場所における習慣的な動作（対象と行為者との抽象的関係性）を焦点化するといえる (Aguilar-Guevara et al. 2011, Carlson et al. 2013)。日本語でも，「病院に行く」という表現は，単に病院の建物に移動したというよりも，「医療行為を受ける」という含意の方が強いように思われる。アイヌ語においても，次の例は，単なる移動を超えてそこでの行為（狩りなど）を含意する。

(11) kim ta paye=an.
mountain LOC go =1SG
‘私は（狩りをしに）山に行く’

このように，慣習的な意味を含意する“weak definite”で共通する特徴を *kim* も有しているといえる。また，*kim* が *ekimne* [e-kim-ne]「山へ行く」のように動詞化されると，「（狩猟，薪とり，採集などに）山へ行く，畑へ行く，山／畑の仕事に行く（田村 1996）」というように，より意味が具体的に慣習的なそこでの行為を表すようになるということからも支持される。また，辞書の記述によれば，*kim* は そこへ行ったりその中を歩いたり働いたりする場所としての山を表すのに対し，「山」を表すもう一つの単語である *nupuri* は「地上にうず高くもり上がった形をしている物体としての山」を表す（田村 1996）。*nupuri* が具体的な対象としての山を指示するのと対照的に，*kim* は，「コミュニティ内の領域としての山」と，そこで人が＜狩りをする＞という抽象的な関係性を指示しているといえる。

しかし，このような特定の行為の含意は今のところ *kim* にしか確認されておらず，他の場所名詞にはそのような含意はないことから，全ての場所名詞が慣習的な意味を持つとは言えず，更に文化人類学，民俗学的な知見を含めた調査が必要である。

6 結論と今後の展望

6.1 結論

本研究において，先行研究で言及されていなかった，位置名詞を伴う名詞句の持つ定性について考察した結果，それが単なる指示対象や照応関係のある定性 (regular definite) ではな

く，より抽象的な関係性を特定するような weak definite として解釈すべきであり，さらにそれが場所名詞の意味構造にも部分的に適用でき，それはアイヌ民族のコミュニティにおける空間利用の構造とも整合することが明らかになった。さらに，場所名詞 *kim* には，場所とそこでの典型的な行為を拡張的に表すという weak definite の特徴があることを指摘した。

6.2 今後の展望

アイヌ語の地名も場所名詞として扱われ (ex. *Satporo ta k=arpa*「札幌へ行く」)，またアイヌ語地名は叙述的かつ習慣的行為を表すものが多いという特徴がある (ex. *Akupet* ［a=ku-pet］「我らが飲む川」)。地名の使用においては，そこでの習慣的な行為による名付けという実世界における定性と，場所表現における文法的な定性が関連していると考えられる。アイヌ語地名を含め，今回触れることができなかった所有形や指示詞が用いられる場合の場所表現 (5b, 5c を参照) についても，定性という観点から包括的に論じることが可能となるだろう。

---

[i] 本研究で扱うアイヌ語の例は，特に断りがない限りアイヌ語の南部方言の一つである沙流方言であり，*uepekere*（昔話）や *yukar*（英雄叙事詩）からの引用である（ただし非文法的な比較例は筆者による作例である）。これらの語りの特徴として，一人称単数を表すときには，日常会話で用いられる *ku=* の代わりに，不定人称主格 *a=* (*an=*)（他動詞型）もしくは=*an*（自動詞型）が用いられることに注意されたい。

[ii] 本研究で用いられるグロスは次のとおりである。LOC：（移動や存在など場所を表す）格助詞，1SG：一人称単数　なお，「=（イコール）」は人称接辞と動詞との接合を表す。

[iii] アイヌ語の語には概念形（短形）と所属形（長形）があり，概念形が一般的な概念を表すのに対して，具体的な指示対象を表す場合は所属形を用いる必要がある（ex. *cise*「（概念としての）家」／*cisehe*「（所有物としての）家」。

[iv] 場所名詞には *annoski*「真夜中」などといった時間的位置を表す単語もあるが，位置名詞との合成語であると分析できることから，本研究では分析の対象外とする。

[v] その他の場所名詞（*oyak*「他の場所」, *siruy* / *casiruy*「（～の）隅」, *hoka*「（囲炉裏の）火」）の意味構造については，拙稿（井上 2016）および学会での口頭発表（井上 2017）にて認知言語学的な観点から論じた。

[vi] 中川 (1984: 57)では，名詞の「referent に対する identifiability」が場所表現で扱われる条件として提案されている。その他にも，先行名詞句との間の部分—全体関係といった意味関係があるといった条件も射程に入れるべきであると述べている。

[vii] もちろん, *the side* が既知の指示対象を指しているという解釈も可能であるが, weak definites の解釈において重要なのは，未知であっても *the* を用いることが可能である，という点である。

参考文献

Aguilar-Guevara, Ana and Joost Zwarts (2011). Weak definites and reference to kinds. *Proceedings of SALT*, **20**, 179–196.

安齊知世 (2008). 「方言から比較した場所名詞, 位置名詞—知里幸恵の著書を通して—」. 井筒勝信（編）. 『アイヌ語学と現代の言語理論』, pp. 329–344, 北海道教育大学教育学部旭川校, 旭川.

Carlson, Greg, Natalie Klein, Whitney Gegg-Harrison and Michael Tanenhaus (2013). Weak definites as a form of definiteness: experimental investigations. *Recherches linguistiques de Vincennes*, **42**, 11–32.

Corblin, Francis (2013). Weak definites as bound relational definites. *Recherches linguistiques de Vincennes,* **42**, 91–122

井上拓也 (2016). 「アイヌ語の場所表現に関する記述的研究: 認知言語学的観点から」. 『言語科学論集』, 22, 1–23.

井上拓也 (2017). 「アイヌ語沙流方言の場所表現における「場所名詞」に関する研究」. 『日本言語学会第 154 回大会予稿集』, 230–235.

泉靖一 (1952). 「沙流アイヌの地縁集団における IWOR」.『民族学研究』, 16/3, 29–45.

井筒勝信 (2006). 「アイヌ語文法の概要」. 井筒勝信（編）『I/YAY-PAKASNU: アイヌ語の学習と教育のために』, 第 1 章: pp. 1–65. 北海道教育大学教育学部旭川校, 旭川.

北原英法 (2006). 「アイヌ語を取り入れた「学習指導要領」:より良い英語学習への橋渡しとして」. 井筒勝信（編）『I/YAY-PAKASNU: アイヌ語の学習と教育のために』, 第 4 章: pp. 111–130. 北海道教育大学教育学部旭川校, 旭川.

Lyons, Christopher (1999). *Definiteness*. Cambridge University Press, Cambridge.

中川裕 (1984).「アイヌ語の名詞と場所表現」. 『東京大学言語学論集' 84』, 149–160.

Poesio, Massimo (1994). Weak definites. *Semantics and Linguistic Theory.* **4**, 282–299.

田窪行則 (1984). 「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」.『日本語・日本文化』, **12**, 89-117. （田窪行則 (2010). 『日本語の構造—推論と知識管理—』. pp. 101–124, くろしお出版, 東京.）

田村すず子 (1982). 「アイヌ語沙流方言における上下を表す位置名詞」. 『言語研究』, **82**, 1-28.

田村すず子 (1985). 『アイヌ語音声資料 2』. 早稲田大学語学教育研究所, 東京.

田村すず子 (1996). 『アイヌ語沙流方言辞典』. 草風館, 東京.

A Study on Definiteness in Place Expressions in the Ainu Language

—Through a Comparison with English "Weak Definites"—

Takuya Inoue
Kyoto University

In previous studies on the Ainu language, some researchers have claimed that definiteness involves conditions when so-called "place expressions" in Ainu are employed (Nakagawa 1984, Izutsu 2006, Kitahara 2006), although there is no grammatical marker which indicates definiteness. In place expressions, the postpositions (*ta* 'at', *un* 'to', *wa* 'from', *peka* 'through') are employed to indicate the positions of objects or events. Izutsu (2006: 18) claims that the noun phrases in place expressions should have regular definite features, because *cise* 'house' in the expression *cise or ta hossippa=an* 'I went back to the house' is always interpreted as 'the speaker's house' or 'a particular house'.

However, this analysis cannot explain the existence of some cases, such as <u>*sine pon toska ka*</u> *un a=esoykosanu ayke* "when I went on <u>upper-side of a small hill</u>," where the underlined noun phrase indicates one indefinite entity. In this study, we introduced the concept of "weak definites" (Poesio 1994) to deal with such cases. In English, one of the typical cases of the weak definite is the usage of the positional prepositions as in "He painted *the side* of a house," where the speaker does not necessarily know beforehand the exact side of the house. In this case, the conceptual structure of the noun phrase ("the side of a house") is composed of limited numbers of concepts. That is, the positional words that co-occur with a house are limited: *top*, *bottom* and *(left/right/behind/front) side*. The same explanation is applicable to the conceptual structure indicated by the positional nouns of the Ainu language. Therefore, the place expressions can be explained as weak definite, instead of as regular definite.

Ainu people have only two directions relative to geographical features: for example, *kim* 'mountain-ward(s)' and *pis* 'beach-ward(s)' together make up the limited structure of geographical concepts. They can function as positional nouns, and we can also say that locative nouns have weak definite features because they comprise of systematic and limited structures of space in the daily life of Ainu people.